

反転授業に教室外非同期型グループワークを取り入れた授業方略の取組み

於:2022年度 私情協 対話集会
2022年12月17日

関西学院大学国際学部国際学科
(経済・経営領域)教授
木本 圭一
kimoto@kwansei.ac.jp



1

1. はじめに

- 本報告は、2014年から2021年まで行ってきた反転授業の方法と、2022年に新たに導入したクラウドファイルを活用した教室外グループワーク(非同期)について比較分析し、その効果と課題について示すものである。



2

2. 対象授業の学修到達目標

- 基本財務諸表の内容が理解できるようになること。
- 財務諸表を分析することによって、企業を評価することができるようになること。



3

貸借対照表

X4年3月31日

(単位：億円)

(資産の部)		(負債の部)	
流動資産		流動負債	
現金及び預金	149	支払手形	211
受取手形	101	買掛金	155
売掛金	186	短期借入金	332
有価証券	47	未払金	283
棚卸資産	141	預り金	86
その他	790	その他	68
貸倒引当金	△ 28	流動負債合計	1,135
流動資産合計	1,386		
		固定負債	
固定資産		社債	531
有形固定資産		長期借入金	202
建物	177	退職給付引当金	22
構築物	36	その他	128
機械装置	227	固定負債合計	883
車両運搬具	24	負債合計	2,018
工具器具備品	131		
土地	133	(純資産の部)	
建設仮勘定	47	775	株主資本
無形固定資産		資本金	606
ソフトウェア	47	資本剰余金	804
その他	3	利益剰余金	
投資その他の資産		利益準備金	54
投資有価証券	1,494	その他利益剰余金	482
長期貸付金	1	自己株式	△ 133
その他	140	株主資本合計	1,813
貸倒引当金	△ 2		
固定資産合計	2,458	評価・換算差額等	
		その他有価証券評価差額金	14
繰延資産		純資産合計	1,827
開発費	1		
繰延資産合計	1	負債純資産合計	3,845
資産合計	3,845		

※ なお△はマイナスを意味する。



4

損益計算書		
自 X3年4月1日		
至 X4年3月31日		(単位:億円)
売上高		3,895
売上原価		3,190
売上総利益		705
販売費及び一般管理費		451
営業利益		254
営業外収益		
受取利息	2	
受取配当金	135	
雑収入	4	
営業外収益合計		141
営業外費用		
支払利息	10	
社債利息	5	
雑支出	43	
営業外費用合計		58
経常利益		337
特別利益		
固定資産売却益	8	
投資有価証券売却益	26	
特別利益合計		34
特別損失		
固定資産売却損	30	
減損損失	27	
災害による損失	35	
特別損失合計		92
税引前当期純利益		279
法人税、住民税及び事業税	80	
法人税等調整額	△ 41	
法人税等合計		39
当期純利益		240

5



3. 授業概要

(学修成果の評価方法、配当年次、単位数、クラス数、履修者概数)

- 学修成果の評価方法

反転授業導入前(2013年) 学年末試験

反転授業導入後(2014年～)

授業開始時の確認テスト、演習レポート、学年末試験。

(完全オンライン環境下の2020年はレポートのみ)

(2022年は、学年末試験または最終レポート)

- 配当年次:1年生

- 単位数:2単位

- クラス数:1

- 履修者数:

13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年
40	26	39	71	13	8	66	121	66	27

6



4. 教育改善の目標

- 2014年から導入した反転授業では、下記を目標として、教育方法の改善を図ってきた。
 - －財務諸表に関する知識の定着・活用
 - －財務諸表分析という判断力の獲得
 - －学修過程および学修効果の可視化による成長支援
 - －質を伴った学修時間の増加



7

5. 教育改善の内容(反転授業導入前後)

- 反転授業導入前:講義の予習・復習は受講生任せ。
↓
- 反転授業導入後の2014年以降:テキスト内容をビデオ教材による予習によって修得。授業中は演習が中心。教室外で、授業演習内容の復習。



8

6. 教育改善の内容 2022年

- グループワーク演習は、各受講生がGoogle Document(以下、GD)に書き込み、グループで議論した内容を修得の上、対面授業に臨むようにした。教員が各グループのGDを適宜閲覧し、コメントを記入することによって、教室外学修の実質化が高まった。
- その成果を元に教室内演習ではグループワークが活性化した。
↓
教室外学修におけるインプット・アウトプットの相互作用。



9

7. 教育効果とその確認

- 授業評価アンケートから



10

理解度の確認

学生による授業評価	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年
最終試験受験者数	40	26	39	71	13	8	66	121	66	27
回答者数	31	23	37	62	10	8	66	91	63	27
担当者が学生の理解度を確認しながらこの授業を進める工夫をしていた	4.4	3.3	3.8	3.5	4.3	4.1	3.6	3.9	3.8	4.3
(5)そう思う	61.3	34.8	47.2	33.9	60.0	25.0	22.7	37.4	28.6	33.3
(4)どちらかというと思う	22.6	17.4	16.7	22.6	20.0	62.5	37.9	37.4	33.3	63.0
(3)どちらともいえない	9.7	17.4	16.7	19.4	10.0	12.5	21.2	12.1	22.2	3.7
(2)どちらかというとは思わない	6.5	8.7	5.6	8.1	10.0		15.2	7.7	14.3	
(1)そう思わない		21.7	13.9	14.5			3.0	5.5	1.6	

- 「担当者による学生の理解度の確認」は、反転授業を開始してから、最も高い評価となった。そう思わない層は全くなり、受講生にとって、授業の進め方は各自の理解度に沿ったものであった。



満足度

学生による授業評価	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年
回答者数	31	23	37	62	10	8	66	91	63	27
全体としてこの授業に満足している	4.3	3.7	3.8	3.4	4.3	4.5	3.6	3.6	3.5	4.4
(5)そう思う	51.6	34.8	44.4	21.0	50.0	50.0	21.2	23.1	6.4	51.9
(4)どちらかというと思う	29.0	34.8	19.4	33.9	40.0	50.0	36.4	37.4	47.6	33.3
(3)どちらともいえない	16.1	13.0	19.4	21.0			24.2	25.3	34.9	14.8
(2)どちらかというとは思わない	3.2	4.3	5.6	12.9	10.0		13.6	7.7	7.9	
(1)そう思わない		13.0	11.1	11.3			4.5	6.6	3.2	

- 満足度は18年を除き、この10年で最も高い数字となっている。不満の学生はおらず、高い満足度となっている。経営戦略と分析数値の関係を考えさせる時間をかなり多くとったため、受講生が財務諸表分析を行う意味について、しっかり理解できたためである。



教室外学修時間

学生による授業評価	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年
回答者数	31	23	37	62	10	8	66	91	63	27
教室外学修平均(下記番号の平均)	2.6	3.2	2.9	2.6	3.3	3.1	3.5	4.0	3.1	3.3
(5)3時間以上	3.3	13.0	11.1	8.6			13.6	36.3	3.2	
(4)2時間以上3時間未満	13.3	21.7	13.9	5.2	50.0	25.0	34.8	29.7	28.6	33.3
(3)1時間以上2時間未満	33.3	34.8	38.9	36.2	30.0	62.5	36.4	27.5	49.2	59.3
(2)1時間未満	40.0	30.4	27.8	34.5	20.0	12.5	15.2	5.5	19.0	7.4
(1)0時間	10.0		8.3	15.5						

- 今年は昨年に比べ、教室外学修時間は平均的に伸びた。1時間未満という時間帯の受講生が減り、それ以上の時間帯の受講生が増えた。グループワークにおいて、対面だけでなく、それへの準備としてGDへの書き込みを行うという演習形態をとったことが大きい要因である。



積極性

学生による授業評価	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年
回答者数	31	23	37	62	10	8	66	91	63	27
この授業に積極的に取り組んだ	3.8	4.3	4.0	4.0	4.5	4.4	3.9	4.2	4.0	4.2
(5)そう思う	31.0	52.2	47.1	41.9	50.0	37.5	24.2	39.6	30.2	37.0
(4)どちらかというと思う	37.9	26.1	26.5	24.2	50.0	62.5	48.5	46.2	42.9	51.9
(3)どちらともいえない	13.8	17.4	11.8	25.8			22.7	7.7	23.8	7.4
(2)どちらかというとは思わない	17.2	4.3	8.8	3.2			4.5	4.4	1.6	3.7
(1)そう思わない			5.9	4.8				2.2	1.6	

- 積極性は、昨年よりも高くなっている。戦略と分析数値の関係を自分で考える、あるいはグループで意見を出し合って検討する、という方法を取ったので、積極的にならざるを得ない。この点が大きな要因となっている。



8. 教育効果とその確認(修得度)

(2022年の修得度)

- 平常評価の選択肢問題によって測った修得度は2019年および2021年と同様であった。
- 平常評価としてのレポート演習成果は例年より高い修得度であった。
- 最終レポートの財務諸表分析に関する成果は、2020年(レポート)、2021年(記述式)より高い修得度であった。



9. 2022年導入内容の効果(総括)

- 平常評価のグループワーク演習成果および最終レポートの修得度が例年以上に高かった。対面グループワークにおいて必要な資料入力や解釈記入をGDに1週間かけて書きこみ、各メンバーが目通ししている状態で行ったことによる効果が大きかったと思われる。そのことは満足度・積極性の評価が高かった要因ともなっている。
- 2020年や2021年のオンライン時に効果的であったGDについて、週をまたいで活用したことにより、「知識の定着」以外に、「学修過程および学修効果の可視化による成長支援」が達成でき、「質を伴った学修時間の増加」も確保できた。



10. 反転授業拡張の可能性

- 反転授業は、教室外で知識習得のためのインプットを行い、教室内では演習などのアウトプットを行うことで、知識の定着を図る方法と定義されることが多い。(巻末参考文献の3編を参照)
- 教室外でGDなどのクラウドファイルを非同期で活用し、グループワークを実施する方法は、反転授業の再定義(拡張)の可能性を示唆するものである。
- また、それは、教室外でインプット・アウトプットの相互作用を生み、学修過程の可視化や教室外学修時間の実質化に大きく貢献する。



11. 実施上の課題

- クラウドファイルを利用した教室外グループワークでは、チャットなどに比べて内容を詳細に記述でき、ファイル上で議論を論理的に進めることができる利点があるが、非同期であるため、記載後に他のメンバーが閲覧し反応するのに時間的なラグが生じる。そのため、書き込みが他のメンバーに即時に伝わる方法を採用するか、別途SNSなどを使って連絡を取り合う必要がある。



参考文献

- Baker, J. W. (2000), "The "Classroom Flip": Using Web Course Management Tools to become the Guide by the Side" In J. A. Chambers (Ed.), Selected papers from the 11th International Conference on College Teaching and Learning, pp.9-17. Florida Community College at Jacksonville.
- Bergmann, J. and A.Sams (2012), Flip Your Classroom: Reach Every Student in Every Class Every Day. International Society for Technology in Education. (訳書：ジョナサン・バーグマン、アーロン・サムズ著、山内祐平、大浦弘樹監修、上原裕美子訳『反転授業－基本を宿題で学んでから、授業で応用力を身につける』株式会社オデッセイコミュニケーションズ、2014年)
- Lage, M., G.Platt and M.Treglia (2000), "Inverting the Classroom: A Gateway to Creating an Inclusive Learning Environment," The Journal of Economic Education. Vol.31, No.1, pp.30-43.

